

座頭なかせ

むかし、横根村の箕手と膝折の辺りに、名古屋と刈谷を結ぶ街道があつて、多くの旅人が行き来していました。ところが、この辺りは村でも一番高いところで、おまけに道がとてもせまくなっていたので、ここを通る人はたいへんなんぎをしていました。天氣のいい、ある春の日でした。仲よしのふたりが、旅の途中にこの辺りにやってきました。

「ああ、つかれたな。こちらで少し休んでいかんか。わしは、足がいどうなつたわ。」
「お前は、本当にだらしのねえやつだなあ。もうちよつと行くと、そりやあ景色のええところがあるで、そこで一服するほうがええぞ。」

「本当か。」

「本当だとも、きれいなつづじが咲いててなあ……。」

「そうか。それじゃ、そこまでしんぼうするか。」

ふたりはまた、とぼとぼと歩き始めました。

「それにしても、この辺りは道はせまいし、坂は急だし、谷は深いし、谷をのぞいた



らすいこまれそうだぞ。」

「ああ、気をつけんと谷底までまっさ
かさまだぞ。」

と話しながら、ふたりは重い足をひき
ずるようにしてしばらく行くと、向こ
うからひとりの旅人がやってくるのが
目にとまりました。

「ああ、危あぶねえなあ。谷に落つこちそ
うだぞ。」

「おい、あの人は、目が不自由じゃな
いのか。つえをついてるぞ。」

と、ふたりは思わずかけ出しました。

「あんたさん。だいじょうぶかよう。

この先は道がけわしいぞ。」

「だいぶつかれていなさるね。」

と、ふたりは目の不自由な旅人に声をかけました。目の不自由な旅人は、

「目が見えないものですから……。でも、どうしても急ぎの用で行かなくてはなりません。」

と、いいます。

「それはたいへんです。どうですか、ここらで一休みしませんか。」

「ありがとうございます。そうさせていただきます。」

「じゃあ。景色のええところで休みましょう。」

と、見晴らしのいいところを選んで、三人は、並んで道ばたにこしをおろしました。

「ここが、さつきわしがいつた景色のいいところだ。」

「おお、つつじが美しく咲いとるなあ。」

「衣ヶ浦ころもがうらの向こうに三河みかわの村々が、見えるだろう。」

「本当に、ええ景色だなあ。」

ふたりの話を聞いていた目の不自由な旅人は、

「つつじがいつぱい咲いているのですか。さぞかしきれいでしょね。わたしは、五

つするとき、病気で目が見えなくなりました。けど、それまでは、春になると近くの

山につつじが一面に咲いていたのをおぼろげながら覚えています。もう、四十年も

むかしのことです。」

と、身の上話を始めました。さらに、

「今は、あんなまをしたり、琴ことのひき語りをしたりしてくらしている座頭です。きょうは、琴の用で出かけるところです。」

と、話を続けました。

そんな話を聞いているうちに、しばらくの時間が過ぎました。

「さあ、そろそろ出かけるか。」

「そうだな、つかれも少しとれたようだし…。」

と、ふたりは立ち上がりました。でも、目の不自由な旅人は、

「わたしは、もう少しいいにおいをかいでいきます。お先にどうぞ。」
と、立とうとしません。そこで、ふたりは、

「この辺りは、道はせまいし、坂は急だし、谷は深いし、気をつけてくださいよ。」



「それじゃあ、くれぐれも気をつけて……。」

と、目の不自由な旅人を残して出かけました。

それから何日かが過ぎました。ふたりの旅人が、旅の帰りに横根村を通ると、

「座頭が、がけのつつじを取ろうとして、谷底へ落ちたげな。」

「座頭は、助けてくれる人もなくて、ひとりで悲しみ泣いどつたそうだ。」

という話を耳にしました。ふたりは、

「何だか、悪いことをしたなあ。」

「ああ、かわいそうなことをしたなあ。」

と、暗い気持ちになりました。

それから、また、時が過ぎました。だれいともなく、横根村の箕手と膝折の辺りを「座頭なかせ」と呼ぶようになりました。

横根地区に伝わる話です。

大府東高等学校の北の辺りが、「座頭なかせ」と呼ばれていたところですが、むかしと道すじは変わっていませんが、開発が進み、まわりの様子はすっかり変わってしまいました。